

女って大変。 働くことと生きることの ワークライフバランス考

編著 澁谷智子

定価 1890 円(本体 1800 円+税 5%)
医学書院



女が働くときにつきまとう課題

本書は十章よりなっており、30 代以上の著者それぞれが女として働き生きてきた経験と考えを述べている。筆者は家庭と看護専門職の仕事の両立を図りつつ、4 人の親を見送り、駆け抜け生きてきた。その人生の折々に体験したことと重なり合い共感できることが多々あった。特に、神谷美恵子の生涯に焦点を当てている章では、あらためて女が働くときにつきまとう課題を再認識した。

幼いころから、女だからこそ自立して手に職をもつこと、経済的自立を図り自活すること、これがわが家の教育方針であった。結果、兄と 6 人の姉妹は何らかの免許を手にし、筆者は看護師・保健師と養護教諭免許を取得した。

そして、大学病院の看護管理者(トップマネジメント)を最後に定年退職し、通算 42 年間の仕事人生を送

り、今再び看護専門職の仕事を続けている。

筆者の場合、「女って大変」という感覚はあまりもたないままひた走ってきたように思う。仕事仲間の多くは専門職であったからだろうか。仕事を極めることが人生の中核で、「世の中は男社会だ」と憤りながらも、無我夢中の毎日だった。むしろいつも胸につかえていたものは、看護職を取り巻く労働環境の過酷さであり、これは「必ず改善されなければならない」という強い思いにつながっている。

二度と味わわせたくない 悲しさゆえに

多くの人に支えられ、仕事を続けることができた一方で、かなえられなかった多くのことを振り返り、同じつらさを次代の人に味わわせたくないという思いをもった。職員の家族や生活を尊重する制度が十分でないなかで、

せめて管理者の裁量ででき得ることはかなえてあげたいと考えていた。子どもの入学式、運動会、卒業式などへの参加、子どもが病気であればそばにいられるように、職員自身がつわりで苦しいときに休めるように……。こうした思いは、実は筆者自身が家族にできなかったゆえの悲しさと、わが子に対しての罪滅ぼしが混じり合った感情が根にあったように思う。

現在、日本看護協会は、重点事業「働き続けられる労働条件・労働環境の改善」に取り組んでいる。「看護師の雇用の質の向上に関する厚生労働省内プロジェクト報告書および関係 5 局長連名通知」の発出はその成果である。「医療従事者の健康と安全が患者の健康と安全を守る」の理念のもと、「夜勤の負担軽減と長時間労働の是正」のガイドライン策定、「ワーク・ライフ・バランス推進のワークショップ」の取り組みを進めている。40 数年前に比べれば、改正育児・介護休業法の恩恵や短時間正職員制度など、働きやすい環境が整えられつつあるが、依然として現実には厳しい。

「女って大変」は女が大きく変化を起こすという意味でもある。女が抱える現実を、日本の国の課題として社会の整備が進められれば、国の繁栄は間違いのない、そんなことに気づかせてくれる一冊である。

女が抱える問題は国の問題

〔評者〕 小島恭子 日本看護協会 専門職支援・中央ナースセンター事業部 部長